

試読版

カット & ペーストで この世界を生きていく

著：咲夜 イラスト：PiNe (パィネ)



※試読版は制作中のものです。
一部表記に乱れ等ある場合があります。
6月発売の製品版とは内容が一部異なる場合があります。

1章 秘密のスキル

僕の名前はマイン。

今日15歳になり、成人を迎えた。そうこれで大人の仲間入りだ。

成人を迎えた子供たちは神殿に行き、神様からスキルと呼ばれる能力を最大で3つ授かることができる。スキルには戦い向けのものや生活に役立つもの、何に使うのか全く不明なものなどいくつもあるんだ。

そして、授かったスキルの組み合わせによっては、とんでもない能力に化ける。

過去に英雄と呼ばれた人たちのほとんどが、スキルの組み合わせによって大成した者だと言われている。

例えば、国王様が授かったスキルは2つ。【片手剣・聖】と【腕力強化・大】の組み合わせだ。

片手剣を代表とする戦闘系のスキルは、その強さに段階がある。

現在分かっているのは、【片手剣】↓【片手剣・極】↓【片手剣・聖】↓【片手剣・神】のような形で4段階に分かれている。

つまり、国王様は上から2番目に強い片手剣の能力を得たということだね。

そして、もう1つのスキル【腕力強化】。文字通り、腕力を強くするスキルで、先の【片手剣】スキルと非常に相性がいい。

【腕力強化】にも強さに段階があり、国王様の場合は、これまた2番目に強いスキルだ。

この2つのスキルの組み合わせによって、国王様は無双の力を手に入れた。その後、幾多の功績を残し、国王になったというわけだ。

強い効果を持つスキルになればなるほど、授かる確率は低くなるというのが神殿の見解らしい。だから、強い効果を持ち、最適な組み合わせでスキルを授かることは滅多にないのだ。

何しろ、スキルの数は無限……とはいわないが、とんでもない数がある。

その中で強い効果があるスキルの数は、そんなに沢山はない。

だからこそ、国王様が得た2つのスキル、そしてその組み合わせは際立っていたということになるわけだ。神殿では、国王様がこの組み合わせで授かった時、奇跡の組み合わせだって大騒ぎになったみたいだよ。

成人を迎えた子供たち、そしてその家族たちは、胸に大きな希望を持って神殿に足を運ぶ。

そう、国王様のように「当たり前」のスキルと奇跡の組み合わせを得ることを夢見てだ。

ちなみに僕の両親は既に亡くなっている。10歳の時、流行病で死んでしまったんだ。だから

他の新成人たちと違い、僕は1人で神殿に来ている。

……お父さんは、すぐ腕の良い狩人だった。

お父さんの見よう見まねで、家に残っていた罾を使い、野兎などの小動物を狩る。そして、同時に薬草などを採取することで、何とか僕は日々の糧を得て今日まで生きてこれたのだ。

とはいっても、スキルを授かる前の未成年がやることだから、大して大きな成果を得ることなんて、とてもできっこない。日々、本当にどうにか暮らしているだけの獲物を狩るのが精一杯だったのだ。

そんな少ない獲物だったが、両親がご近所さんやいろいろなお店の人たちと付き合いが良かったこともあり、獲物や薬草を少し高めに買い取ってくれたのだ。

そんな優しい人たちのおかげで、ぎりぎりの生活ながらも1人で何とか生きてこれたんだ。

町の人たちには心から感謝をしなきゃね。だけど、そんなぎりぎりの苦しい生活もきつと今日で終わる……はずだ。

神様から授かるスキルがよほど悪くなければ、今よりは楽な生活になるだろう。

それに、スキルの組み合わせが良ければ、一気に成り上がることでできるはずだ！

他の新成人と同様に僕もまた、希望と夢を胸に抱き、神殿へ足を運ぶのだった。



神殿に到着し、期待と不安が入り交じった不思議な高揚感と共に待つこと40分。

待っている間、スキルを受け取った新成人たちの微妙な表情を見るたびに『良いスキルは貰えなかったのか』と想像し、不安な気持ちが大きくなっていく。……大丈夫だ。きっと僕は良いスキルを授けられる。そう自分に言い聞かせて、不安な気持ちをどうにかごまかしていく。

そんなことを思いながら待っていると、ついに僕の番がやってきたみたいだ。
「さて、君の番だよ。その円の中に入り、神様に無事成人できたことの喜びと感謝の気持ちを込めて祈りなさい」

僕は係の人に言われるままに円に入り、神様に語りかけるように祈りを捧げた。両親が亡くなったのにもかかわらず、何とか今日という日を迎えられることに、深い感謝の気持ちを込めて。

すると、僕の体がうっすらと数秒間だけ光って、頭の中に2つのスキルが浮かんできた。

「ふむ、無事スキルを授かったようだ。よろしい。この珠に手を乗せたまえ」

言われた通り、差し出された透明な珠に手を乗せる。すると珠の中に、先ほど頭に浮かんできた2つのスキルが表示された。

すなわち【鑑定・全】【カット&ペースト】の2つだ。

【鑑定】というスキルは、万物の定められた詳細を調べることができる。結構レアなスキルのはずだ。

だが、このスキル。何でも調べられるわけではない。鑑定の後ろに付いている属性だけを調べることができるのだ。

よく聞く属性は【鑑定・年齢】【鑑定・氏名】【鑑定・動物】【鑑定・性別】などで、レアスキルではあっても、鑑定できる属性によっては外れスキルとなる。

例えば【鑑定・性別】の場合が分かりやすい。性別なんてわざわざ鑑定しなくても普通は分かる。だからレアスキルではあっても、【鑑定・性別】は外れスキルといえるだろう。

そんな当たり外れがある中で、僕の授かった鑑定の属性は『全』とある。恐らくこれは、鑑定スキルの中でも1番上位に当たる属性じゃないだろうか。

『全』という額面通りの意味ならば、他の鑑定と違い、属性による制限など一切関係なく鑑定できるはずだ。

まだ、このスキルをどのように活用していくかは全く思いつかないけれど、きっと僕は当たりを授かったのだと思う。

そして、もう1つ授かった【カット&ペースト】だが、これは正直言って微妙なスキルだ。

【カット&ペースト】というスキル自体は聞いたことがないが、【カット】と【ペースト】というスキルは聞いたことがある。

【カット】は目に見えた物を、切り取るスキルだ。

例えば料理をする時に使用すれば、包丁などの刃物なしに食材を切り取れるし、鉱物などの硬い物、あるいは逆に刃物が通らないような柔らかい物などを切るのも容易になる。

こうやって例を挙げれば、この【カット】というスキルは結構便利なスキルだと思うだろう。しかし、このスキルは対象が基本的に静物に限られていて、生物は対象外なのだ。

これが生物に対しても有効ならば、評価も一変しただろう。なぜなら、戦闘において非常に有利に働くことが予想されるからだ。武器を持たずに魔物や悪人を切ることであれば、それこそ大当たりのスキルだと言えたのだけど……。実際には、そういった使い方はできないのだ。

だがこの【カット】、モンスターを倒した後の評価は非常に良いのだ。魔物を倒せば、解体しなければならぬ。解体という作業は手間がかかり、どうしても時間がかかるものだ。

時間がかかれば、解体時に出る魔物の血の匂いが、新たな魔物を呼び寄せる可能性が出てくる。しかし【カット】を使用すれば、その解体作業が大幅に短縮されるわけだ。

冒険者たちにとってみれば、これは非常にありがたい。それ故、冒険者たちには非常に歓迎されるスキルで、そういった意味では当たりのスキルだといえなくもない。

そして【ペースト】は、目に見えた物を任意の場所に、貼り付けるスキルだ。いわゆる接着剤的な使い方ができるスキルである。

接着剤と違って、貼り付ける素材間での制限などは一切ない。どんな素材であっても関係なく貼り付くのだ。便利といえば便利である。しかし、欠点もある。接着剤と違って一度貼り付けたら最後、貼り付けた本人ですら剥がすことができない。例えば、指と素材を誤って貼り付けてしまうと最悪である。【カット】を使えば剥がせる（正確には、剥がすではなく、切り取る。だが）ようだが、【ペースト】と【カット】を授かった人が同時にその場に居ることなど通常はあり得ないため、基本的にはこの【ペースト】というスキルは、使い勝手が悪いスキルだといえるだろう。

もっとも、職人と呼ばれる生産者の中には、このスキルを正確無比に使用して、とてつもなく頑丈な道具や家具などを作成していると聞くので、使い方次第では有益なスキルだといえないこともない。ちなみに【ペースト】は【カット】と違って、生物が対象でも使えるみたいだ。まあ結局のところ、この2つのスキルに対する世間一般の認識は、持っていたら、ちょっと便利だね！という程度だ。

僕の場合は【カット&ペースト】だから、【ペースト】の使い勝手の悪さも解消されていて、単体で授かった人たちよりは恐らく便利だろう。

「ふむ【鑑定・全】とはね……随分と珍しいスキルを授かったようだね。【カット&ペースト】も使いようによっては便利だろう」

透明な珠を覗き込みながら、神殿の人が僕に話しかけてきた。

「これで今日の日程は終了だ。これからの君の人生に幸あらんことを！」

僕は神殿の人にお礼を述べて、帰宅の途につく。乗り合い馬車には、10人ほどの乗客がいた。僕の家は、神殿のある王都から馬車で半日ほど離れたルーカスの町の外れにある。人口1000人程度だけど、王都から比較的近いこともあって、冒険者をはじめとする人々の往来が活発な町だ。

『さて、早速鑑定を使ってみようかな』

馬車に揺られながら、目の前にいる壮年の冒険者に【鑑定】と念しながら目を向ける。すると、脳裏にいくつかの情報が浮かんできた。

名前…キース 種族…ヒューム 性別…男 年齢…48歳 職業…冒険者（C級）

【スキル】片手剣 清掃

へえ、キースさんっていうのか。持つてるスキルは……【片手剣】と【清掃】か。

組み合わせが悪い典型的な例だね。結構いかつい容姿なのに【清掃】とか……ギャップが激しいなあ。【清掃】のことを考えながらキースさんを見てみると、さらに脳裏に情報が浮かんでくる。

【清掃】…掃除を効率よく行うことができる。熟練度が上がるほど、綺麗に掃除ができるようになる。

そうか。鑑定というのは、確認できた情報の項目をさらに詳しく調べられるのか。これはなかなか便利だね。多分【鑑定・全】だからこんな詳細まで見ることができるのだと思う。

そして、今得た情報の中に気になる言葉が含まれていた。それは「熟練度」だ。

熟練度なんて項目は、先ほど確認した情報の中にはなかった。だけど、この言葉から想像するに、スキルは使えば使うほど能力が上がるみたいだ。

なるほど、そういうことならば、鑑定も使えば使うほどっと詳細な情報を得ることができるようになるのではないだろうか。となれば、どんどん鑑定をしていこう。どうせ、半日は馬車の中から動けないのだ。【カット&ペースト】は、人がいる場所では試しにくいしね。

そんなことを考えながら、馬車の中にいる10人全てを鑑定してみた。9人までは鑑定結果に特に問題はなかった……。しかし、10人目の男性を鑑定したところ、とんでもない情報が含まれていたのだ。

名前…ゲスカルト 種族…ヒューム 性別…男 年齢…31歳 職業…盗賊
【スキル】裁縫 短剣・極 俊足（小）

何と、盗賊だ！ 何で乗り合い馬車にこんなのがいるんだ？

しかも、こいつ【短剣・極】を持っている。……それなりの使い手ということだ。

まずい、これはまずいぞ。今は大人しく目を瞑^つって座^まっているけど、いつ暴れ出すか分からない。何人が冒険者が乗り込んでいるけど、不意打ちで斬りかかられたら呆気なく死んでしまおうだろう。ヤツの目的はいつたい何だ？ この馬車の終着地は、僕が住んでいるルーカスの町だ。馬車の中で大人しくしているということは、狙いはルーカスの町なのだろうか。

いや町に入るには嚴重な検査を受けて入るわけだから、盗賊は町に入れないはずだ。

どれだけ考えても正解を思いつかない。いや、思いつけない。今、この盗賊が危険だと分かっているのは、僕しかない。誰かに話すにしても、狭い馬車の中でそんなことを口にすれ

ば当然、盗賊にも聞こえてしまう。

何か、何か方法はないか。ヤツが短剣を持ち出し、暴れ出す前に何とかする方法は……。

焦りながらも、僕みたいな成人したての若造にできることなんか無いと思ってしまう。最善なのは、このまま何事も無く町に到着し、ヤツに目を付けられる前にさっさと家に帰ることだ。だけど、このまま大人しくしているかどうかは全く分からない。

仮に無事に町に着いたとしても、町の中で何か起こり、それに僕が巻き込まれない保証もない。何より馬車の中には、僕の他にも成人を迎えたばかりの若造もいるし、年頃の女性だっている。やはり何か解決策を考えないと、危険なことに違いないだろう。

僕が今できることはいつたい何だ？ できることといえば、今日得たばかりのスキルを使うことくらいしか思い浮かばない。【鑑定】は確かに役に立つスキルだ。だけど、この状況をひっくり返す能力はない。ならば、もう1つのスキル【カット&ペースト】を何とか上手く使えないだろうか。【カット】は生き物には使えない。それに使えたとしても、まだ何もしていない相手に攻撃することはできない。そんなことをすれば、捕まるのはヤツではなく僕になってしまう。相手に危害を与えず、無力化するためには……。

そうか【ペースト】でヤツの靴を床に貼り付けてしまおう。そうすれば、急に行動されても動けなくなるはずだ。靴を脱ぎ捨てるにしても、すぐには脱げないだろう。

あとは腰に差している短剣だな。鞘と本体を貼り付けてしまおう。ここまですれば、何か行動を起こされても、キースさんたち冒険者の人が対処できるはずだ。

よし、そうと決まれば早速行動だ。

スキルを発動すると、上手く発動した手応えが脳裏に返ってきた。初めての使用だったけど、何とか使うことができたようだ。ふう……これでひとまずは安心だ。ただ、このままだと町に着いた後の対処にはならない。

靴が貼り付いていても、脱げば移動できるし、短剣だって新しく買い直せばすむことだ。ヤツの目的がこの馬車なのか、ルーカスの町の中にあるのか分からない以上、根本的な解決にならない。

これだけ堂々と馬車に乗り込んでいるんだ。もし、ルーカスの町が目的なら、中に入る算段はきつと立っているんだろう。

だとすると、町に何か被害が出てしまうかもしれない。当面の危機を防ぐ目処が立ったことで、僕は少し冷静になれた。

そして、冷静になった僕は……とんでもないことを思いついてしまった。

スキルは組み合わせで、その能力を大きく向上させる。

王様が、高い能力の剣術＋腕力強化を組み合わせるスキル単体の効果を嵩上げし、より強力

なスキルとなったように。もしかすると、僕の得た2つのスキルも相乗効果のある組み合わせなのかもしれない。

僕は、その思いつきと得られるかもしれない効果に期待と恐怖を覚えながら、実践してみることにする。まず、ゲスカルトを鑑定する。

名前…ゲスカルト 種族…ヒューム 性別…男 年齢…31歳 職業…盗賊

【スキル】裁縫 短剣・極 俊足(小)

当然、先ほど鑑定した内容と変わらない。そして、ここで僕は【カット】を使用する。対象はゲスカルトの所持するスキル【短剣・極】だ。

すると、脳内に先ほどのペースト同様、カットが発動した手応えが返ってくる。そして、もう一度ゲスカルトを鑑定してみる。

名前…ゲスカルト 種族…ヒューム 性別…男 年齢…31歳 職業…盗賊

【スキル】裁縫 俊足(小)

!!!
思った通りだ、スキルを切り取ることができた！【カット】は目に見えた物を、切り取るスキルだ。【鑑定・全】を使えば、目で（正確には脳内で）見ることが出来る情報もその対象となるんだ。

そして、切り取ったスキルを……【ペースト】を使って僕のスキル欄に貼り付けてみる。

名前…マイン 種族…ヒューム 性別…男 年齢…15歳 職業…狩人見習い

【スキル】鑑定・全 カット&ペースト 短剣・極

……できた！ できてしまった！！

何てことだ。神から授かることでしか得られないスキルを、僕は自由に得る手段を手に入れてしまった。自分自身に起こっている、このとんでもないでき事にとってもない衝撃を受ける。果たしていいのだろうか。僕がこんな力を手に入れてしまった。

ある意味、ゲスカルトの正体を知った時よりも大きな衝撃を受けた僕は、しばらく呆然としてしまう。だが、時間が立てば動揺も徐々に小さくなっていき、次第に冷静になっていく。家

に着いたら、これから先どうしていくかを考えないといけないな……。

まずは、ゲスカルトから残りのスキルも切り取ろう。そして僕のスキル欄に貼り付ける。

名前…ゲスカルト 種族…ヒューム 性別…男 年齢…31歳 職業…盗賊

【スキル】なし

よし、これでいい。仮にヤツの目的がルーカスの町にあったとしても、思うようにはいかなさうだろう。……多分。僕ができることはここまでだろう。いや、町に着いたらヤツの動向を見た上で、門番の人に相談してみよう。そうすれば、門番の人が対処してくれるはずだ。

取りあえず、ヤツの対処について目処が立ったことで、全身から緊張感が抜けていく。まだ、馬車の中で暴れ出す可能性は十分あるので油断はできないけど、体の力を抜いてリラックスすることにしました。



王都を出発して、そろそろ5時間ほど経ったくらいだろうか。遂に危惧していたことが起

こったのだ。恐らく、ゲスカルトの仲間たちなのだろう。唐突にこの馬車を目がけて向かってくる武装集団を発見した。そして馬車内の人たちが外に目を向けた瞬間、ついにゲスカルトが動いたのだ。

「ヒヤッハー、てめえら大人しく……ウガッ」

……が、事前に仕込んでいた【ペースト】で靴が床に貼り付いていたため、勢いよく立ち上がったものの、その勢いそのままに豪快に床に顔から倒れ込んでしまった。

突然のことだったが、すぐに車内の冒険者たちに取り押さえられて縛り上げられる。そして、護衛についている冒険者とおぼしき人に合流し、向かってくる盗賊集団を迎撃する体制を整えたのだった。

「俺たちも力を貸そう、御者さんよ、当然報酬は少しでも出してくれるんだろ？」

「ええ、助かります、報酬の件はもちろんお出ししますよ」

そんな会話を聞きながら、僕は向かってくる集団を急いで鑑定する。集団は全部で8人だ。その中で特に気になったのは、この3人だ。

名前…ラフレ 種族…ヒューム 性別…女 年齢…26歳 職業…盗賊

【スキル】両手剣 視力強化・中

名前…アイーン 種族…ヒューム 性別…男 年齢…30歳 職業…盗賊

【スキル】礼儀作法 脚力強化・小

名前…シヨウブ 種族…ヒューム 性別…男 年齢…42歳 職業…盗賊

【スキル】魔法・風

残りの5人は戦闘向きのスキルを持っておらず、脅威とは思わなかった。取りあえず、魔法を使えるヤツは危険だ。早速切り取りを使って無力化し、僕のスキルへ貼り付ける。

さらに残りの2人からも、素早くスキルの切り取りを完了させ、僕のスキルへと貼り付けていく。……しかし、盗賊なのに礼儀作法って……。何ともミスマッチだね。

スキルが使えないことに最初に気が付いたのは、シヨウブという名の盗賊だった。遠距離から魔法を使うつもりだったんだろう。何度使おうとしても魔法が発現しないことで、目に見えて動揺している。次に、気が付いたのはラフレという女盗賊だ。急に視力が落ちたのだろう。目を擦るそぶりを何度も行っている。そんな様子を見ているうちに距離はどんどんと縮まり、

盗賊たちと冒険者たちは戦闘へと突入する。スキルが使えなくなったことで思うように戦えない盗賊たちと、数で勝り戦闘経験も豊富な冒険者たちとは、戦いにもならなかった。本当は内部からゲスカルトが攪乱し、その隙に魔法を含めた攻撃でこちらを制圧するつもりだったのだろう。その大前提が全て覆ってしまった盗賊たちは1人、2人と倒されていく。そして戦闘開始から10分後、ゲスカルトを含めて9人いた盗賊たちは2名が死亡、7名が捕らえられ、僕たちの馬車は無事に生き残ることができたのだ。

盗賊の襲撃をはね除けてルーカスの町に帰り着くと、捕らえられた盗賊たちは犯罪奴隷として売られることになったようだ。売られた代金は、迎撃に協力した冒険者たちを含めて、等分されて支払われるそうだ。

僕も手伝ったんだけど、【カット&ベスト】のことを他人に話してよいものかどうか分からないので黙っておいたんだ。

「おう！ マイン、お帰り。無事にスキルは授かることができたのか？」

馴染みの門番さんのエドガーさんが、僕を見つけて声をかけてくれた。

「はい、何とか授かることができました」

「そうか、それならよかった」

人懐っこい笑顔を浮かべながらそう言い残して、門番の仕事に戻っていった。

名前…エドガー・マンセル 種族…ヒューム 性別…男 年齢…24歳 職業…ガーディアン

【スキル】両手槍・聖 礼儀作法 鉄壁

うわー、エドガーさんすごいや！ 【両手槍・聖】を持ってるんだ。しかも、鉄壁とか強そうなスキルも持っている。どれどれ、鉄壁ってどんなスキルなんだろう。さらに鉄壁を鑑定してみる。

【鉄壁】…任意発動型スキルで、自身が望むタイミングで発動させることができる。発動中は防御力が3倍に上昇する。一度使用すると、次回使用まで10分のクールタイムが必要。

へえ、防御力が3倍か、エドガーさんは攻めて良し、守って良しのすごい人なんだな。クールタイムって…一度使用すると、使えない時間ができるんだね。そんなスキルもあるんだ。覚えておこう。当たり前だけど、エドガーさんのスキルを【カット】してません。【カット】

を使うのは、敵対してきた人や盗賊みたいな悪いヤツだけに決めたんだ。手当たり次第に行つてしまえば、強盗と何も変わらないからね。

エドガーさんと別れた後、町にすぐに入ることができた。鑑定をじゃんじゃん使いながら、僕は一路自宅へと歩いていく。自分の知らないスキルをいろいろ発見できて面白かった。



僕の家は町の外れにある。今は僕しか住んでいないけど、もともとはお父さんお母さんと一緒に住んでいた家なのだ。豪邸とは言えないかもしれないが、それなりに立派な家だと僕は思っている。何よりもお父さん、お母さんが遺してくれた大事な家だからね。思い入れも深いんだ。

「ただいま」

誰からも返事が返ってくるわけではないけど、つい口に出してしまう。家の中に入ると気が抜けたのか、僕は床にへたり込んでしまった。

「ふう……何か疲れたなあ」

しばらく、ぼーっとしながら休憩をとることにした。本当に今日は激動の一日だったよなあ

……。ああ、そうだ、ようやく落ち着いたことだし、自分の鑑定をしてみようか。

名前…マイン 種族…ヒューム 性別…男 年齢…15歳 職業…狩人見習い

【スキル】鑑定・全 カット&ペースト 短剣・極 俊足(小) 裁縫 魔法・風 両手剣

視力強化・中 礼儀作法 脚力強化・小 料理 交渉術 錬金術

戦闘中にカットした3人とは別の盗賊たちから、いくつか使い勝手が良さそうなスキルを【カット】しておいた。料理、交渉術、錬金術の3つだ。これから考える今後の方針によっては、役に立ってくれるスキルだと思う。しかし、今日一日だけで一気にスキルが増えたなあ。今はいいけど、これから増えてくるにつれて鑑定の結果が見づらくなりそうだし……。

取得した順にスキルは並んでいるようだけど、これ【カット&ペースト】で見やすく調整できないかな。いろいろ試した結果、スキルの場所を移動することができました！

【スキル】鑑定・全 カット&ペースト 短剣・極 両手剣 脚力強化・小 視力強化・中

俊足(小) 魔法・風 料理 裁縫 礼儀作法 交渉術 錬金術

うん、これで多少見やすくなったかな。これからは定期的に整理しよう。

さて、スキルの確認も無事終わったし、そろそろ今後のことを考えてみようかな。

まず【カット&ペースト】でスキルを切り取り、自分のものにできるという事実。これを他の人たちに教えるかどうか、だな……。この選択は非常に重要なことだと思う。

いくら僕が自分の中の取り決めとして、敵対する相手からしかスキルを【カット】しないと決めていても、きつと信じてはもらえないだろう。そうなるなら当然、僕は避けられてしまうと思う。

そりゃ、そうだろう。気が付かないうちに自分のスキルを盗られているかもしれないと思ったら、怖くて近づくことなんてできやしない。そんなことになってしまえば、生活に支障が出てくる。

他人との関わりなしに生きていくことなんてできやしないんだから。となれば、やはりこのことは内緒にするべきなのだろう。

次に今後の生活についてだ。父さんの遺してくれた罾や猟師道具のおかげで今までは細々と食いつないできたけど、スキルを授かったことだし、何とかこれを生かしていきたい。

じゃあ、いったい何をするか……。だけど……。

【カット】を生かした商売……。一番堅実なのは冒険者に雇われて解体をする、解体屋だろう

か？ けど、冒険者にはいろいろな性格の人がいるからね。解体だけさせて金を払わないなんて人も出てくるかもしれない。そういった人なら、一度目をつけられたら最後。ずっと付きまとうてくるかもしれない。心配しすぎなのかもしれないけど、可能性は十分あると思う。候補にはするけど、取りあえず解体屋は保留かな。

じゃあ【ペースト】はどうだろう？ いや、職人しか思い浮かばないや……。いくら【カット】があるからといっても、一人前になるには時間がかかりすぎる。却下だ、却下!!

うくん、神様から授かったスキル以外は表立って使えないし、案外難しいもんだな。

いろいろ考えたけど、【カット&ペースト】で何かをするっていうのは結構厳しいのかなあ。結局は解体屋くらいなのかな……。いや、待てよ？ せつかくスキルが増えたのだから、狩人としてきちんと行動してみるのも悪くないかも。

【短剣・極】 【俊足（小）】 【視力強化・中】 【脚力強化・小】を駆使すれば、兎みたいな小動物じゃなく大物も狙えるかもしれない……。うん、その方向でやってみるか。これなら新しくスキルが増えても、周りに僕しかいないからバレないだろうし……。早速、明日狩りに出てみよう。

大雑把ではあるが、今後の生活についての方向性が決まった。夕食を食べたら早めに休もうかな。そんなことを考えながら、いつも通りの質素な夕食を作っていく。今日は買い物をする

余裕がなかったので、干し肉と黒パンだけだ。量もそんなになかったのであっさりと食べ終わったけど、いつもより美味しかった気がする。多分これは【料理】スキルが働いたんじゃないだろうか？ これだけ美味しくなるなら、【料理】スキルも繰り返し使用してもっと熟練度を上げて見るのも悪くはないかな。

◆ ◆ ◆
朝、まだ辺りは薄暗い時間に僕は目覚める。早速、昨日決めた通り、狩りに行くための準備を開始する。

革の胸当て、革の籠手、革の脛当てを装備し、解体用の短剣を腰に差す。いつもなら、罨を仕掛けて兎のような小動物を捕獲するんだけど、今日の狙いはフォレスト・シープ、いわゆる羊だ。それほど素早くはないが、鋭角な角を使って突進してくることに睡眠スキルが厄介なため、見つけても今までは逃げていたモンスターだ。ただ、厄介な獲物というだけあって、それなりに高く売れるんだ。肉もクセはあるけど、旨味が強いし、角や蹄などは錬金術の素材として高く買ってもらえる。これを安定して狩ることができたら、生活は大分楽になるはずだ。準備も完了し、初めての本格的な狩りにドキドキしながら、町の裏門から近くの森へと向

かっていく。門番さんに「今日は随分と早いな。気を付けていけよ」と心配されてしまった。

森に向かう道中でも、新たに得たスキルの効果を実感できた。そう【俊足(小)】だ。

軽く走るだけで、今までの全力疾走と同じ速度が出る。しかも息切れも全くない。スキルというものの有用性、効果を改めて実感することができたのだ。そんなわけで、あつという間に目的地に到着できた。

「さうて、ここからが本番だ……」

緊張しているからだろうか、いつもなら出さない独り言を思わず口に出してしまう。それでも何とか慎重に森を進んでいくと、いました！

名前…フォレスト・ラビット 種族…兎族 性別…♀

【アビリティ】なし

目的の羊さんじゃなかったけど、いつもお世話になっている兎さん発見です。

……ん、何だろう？ 見慣れない言葉が鑑定結果にあるぞ？

アビリティ?? いったい何だろう？ 取りあえず、分かんないことは鑑定にらせてみよう。

【アビリティ】…モンスターの体格や体の構造に依存する特殊な技。一般的にはスキルと同一視されている。

モンスター版のスキルってことなのかな？ 説明から推測すると、モンスター専用スキルってことなのだろう。体格や構造ということとは、【カット】しても僕たちヒューム族では使えないのかもしれないね。取りあえず、いつもなら罫を仕掛けて仕留める相手だけど、今回は正面から戦って自分の力を確認してみるか。短剣を手に取り、フォレスト・ラビットの正面に立ちふさがる。

僕に気が付いたフォレスト・ラビットは、怒りを顕わに飛びかかってきた！

【脚力強化・小】を発動させながらひらりと身をかわず。そして身をかわした瞬間に短剣を前へと突き出した。肉を切り裂く感触とフォレスト・ラビットの悲鳴を聞いた後、返り血を浴びながら地面に落下したフォレスト・ラビットを見る。

まだ息はあるようだが、かなりの深手を受けたみたいでピクピクと痙攣している。僕は短剣を振り上げ、そのまま一気に心臓へ突き立てる。

「よし、倒した！」

随分あっさりと倒せたことに自分でも驚きながら、倒した兎を【カット】で解体する。そして持ってきた収納袋に放り込んだ。

この収納袋もお父さんの遺してくれた物で、50 kg程度まで物を入れておける魔道具なんだ。生き物を入れることができないし、獲物を入れたのを忘れちゃうと中で腐って大変なことになるけれど、非常に重宝するのは間違いない。

さて、本命の獲物であるフォレスト・シープを探そう。20分ほど、森の中をウロウロしてさらに兎を2匹倒したが、肝心の羊は一向に見つからない。

どうしたものかと思案していると、遠くの方に大きな黒い影がノソノソと歩いているのが見えた。【視力強化・中】を使い、黒い影を見てみると……なんとオークである。

オークといえば、特に「魔族」と呼ばれる人型のモンスターだ。凶悪なほどの腕力と堅い皮膚を持つ、かなり厄介な魔物といえる。そして、別の種族の女性を攫^{さら}って犯し、繁殖することでも有名だ。だから、町の人たちからはすごく嫌われている。

正直、僕では勝ち目は薄いと思う。僕の腕力では堅い皮膚に短剣が通らないだろうから。取りあえず、鑑定してみるか。

名前…オーク 種族…魔族 性別…♂

【スキル】豪腕
【アビリティ】咆哮

む、スキルとアビリティを両方とも持つてる。さすがに兎とは格が違うということかな。取りあえず、スキルを奪っておこう。アビリティも奪って、その辺の木に貼り付けておくか。ヒュームには使えないみたいだしね。

【豪腕】…任意発動型スキル。自身が望むタイミングで発動させることができる。使用すると腕力が2倍になる。一度使用すると、次の使用まで10分のクールタイムが必要。

……このスキルがあれば、何とか倒せないかな？ スキルとアビリティは既に奪ったから弱体化しているし、僕の懸念だった堅い皮膚も【豪腕】があれば何とかできそうな気がする。けど、真正面からぶつかるとは得策じゃないよね。そっか！ 魔法があつたじゃないか！使ったことがないからすっかり忘れてたよ。うん、背後から魔法で一撃を入れてから戦おう。そうと決めたら、気が付かないように後ろ側に回り込んで、っと。『くらえ！』心の中で

叫んで【魔法・風】を発動する。オークまでの障害になっている木の枝を切り裂きながら、風の魔法がオークの方へと飛んでいく。風が木の枝を切り裂く音で気が付いたのだろうか？ 振り返りこちらを向いてしまった。しかし、突然のことに対応できなかったんだろう。見事に風の魔法はオークの顔面に着弾した。辺り一面に響き渡る叫び声を撒き散らし、オークはのたうち回る。

今だっ！【脚力強化・小】と【俊足（小）】を使用して、一気にオークの懐に飛び込む。そして、奪ったばかりの【豪腕】を発動し、その大きなお腹を横一文字に一気に切り裂いた！

痛みへのたうち回るオークが、滅茶苦茶に腕を振り回している。一端後ろに下がり、安全を確保してから再び【魔法・風】を発動する。至近距離から放たれた風の魔法は、短剣によって切り裂かれたお腹に直撃し、オークの動きが目に見えて鈍くなった。この隙に背後へと回り込み、首に向かって短剣を思い切り突き刺した。

どうやらこれが止めとなったようで、一際大きな叫び声を上げた後、ヤツは崩れ落ちたのだ。倒した……のか？ しばらく様子を伺うがピクリとも動かない。

【カット】で解体してみるか？ 生き物には使えないから、生死の判定もできるからね。

……解体ができる。ということは倒したのか。ふう、ドキドキしたなあ。けど、オークを倒せた！ 僕でもオークを倒せたんだ！！